

|        |       |         |                                 |
|--------|-------|---------|---------------------------------|
| (単組番号) | (単組名) | (所 属)   | (氏名・フリガナ)                       |
| 19     | 安城    | 安城北部小学校 | ミヤケ アンナ<br>-----<br>名 前 三 宅 杏 奈 |
| 分科会番号  | 1     | 分科会名    | 国語教育 (文学その他)                    |

## 研究題目

関わり合いを通して聴く力を高め、思いを豊かに表現する子の育成

## 研究要項

### 1 主題設定の理由

日常生活の中で誰かと関わる際には「話す・聞く」「書く」「読む」力が必要となる。これらの力を育むために、国語科で語彙力や表現力を高める学びをすることが重要であると考え。近年、友達と遊ぶときにオンラインゲームが増えており、人と面と向かって関わる機会が減少し、表情が見えない状況での関わりが増えた。相手の表情が見えない状況では、自分の考えを言葉で正確に伝えることや相手の考えをくみ取るために想像力を働かせることが必要である。児童が相手の気持ちを想像できるようにするため、物語を読むことを通して登場人物の気持ちを考え、想像力を豊かにしたいと考えた。

本学級の児童は、進んで読書をする姿や読み聞かせて本の世界に入り込みながら楽しむ姿が見られ、事前アンケートからは読書好きが多いと言える。また、自分の気持ちに素直で学習に意欲的に取り組む態度が見られる。4月に行った国語科「風のゆうびん屋さん」の学習では、登場人物の様子や出来事が分かる叙述から気持ちを想像して、音読することができた。自分の考えを発表する場面では、多くの児童が自分の考えをもち、考えを伝えようとしてできていた。しかし、国語が嫌いと感じる児童もおり、自分の考えに自信がなかったり、考えを思うように言葉にできなかったりする児童もいる。また、授業の振り返りでは、「楽しかった。」「嬉しかった。」のように、抽象的な表現で自分の感情のみを書く児童が多く、豊かに表現できる児童は少ない。そこで、国語科「名前を見てちょうだい」の学習を通して楽しく登場人物の気持ちを想像し、子ども同士の関わりの中で自分の思いを豊かに表現できるようになってほしいと考え、本主題を設定した。

### 2 目指す児童の姿

主題に迫るための目指す児童の姿を次のように考え、本研究を進めることにした。

- 関わり合いを通して相手の話を聴くことができる子
- 自分の思いを言葉で豊かに表現できる子

#### 仮説1

友達と関わり合うためのグループ活動において、思いやりのある聴き方を考えたり、児童が楽しく話したり聴いたりする体験を積ませることで、思いやりをもって相手の話を聴く力を高めることができるだろう。

### <仮説1に迫る手立て>

- ① 聴き合いをする際に、学級で決めた学び合いの約束、「話している人にはジェスチャーや優しく肩を叩いて教える」ことや「いい姿勢で話を聴く」という約束を確認して行動させることで、思いやりのある聴き方ができるようにする。
- ② 毎週木曜日の朝15分間の、「ほくトーク」（話す・聴く力を育むための活動）や毎日の朝の会で日直のスピーチを行うことで、聴く力を高められるようにする。

### 仮説2

物語の読み取りにおいて、さまざまな教具を用いて登場人物の気持ちの変化を聴き合うことで、自分の思いを言葉で豊かに表現することができるだろう。

### <仮説2に迫る手立て>

- ③ 自分の思いを表現しやすくするために座席を工夫してグループ編成をすることで、話しやすい雰囲気ができるようにする。
- ④ 教科書の本文を載せたワークシートや学びの足跡を活用することで、登場人物の気持ちの変化に気づくことができるようにする。
- ⑤ 感情が表情で分かるフェイスカードを用意して掲示したり、登場人物のお面を作成し、音読をするときに誰が何になりきっているのかを視覚的に分かるように着用したりすることで、登場人物の気持ちを考え、気持ちを込めて音読ができるようにする。

## 3 仮説の検証方法

本研究では、児童の学習の様子や振り返りの記述内容等から、関わり合いを通して聴く力を高め、思いを豊かに表現する児童の育成ができたかを検証する。また、抽出児Aや他児童の様子から手立ての有効性を検証する。

### 【抽出児Aについて】

児童A（以下A）は、年度当初から周りの環境に慣れるまでに時間がかかり、不安や心配だと思いう気持ちを強くもっている。また、自分の気持ちを言葉で表現することが難しく、教室から飛び出してしまうくまったり、自分の物を投げて涙を流したりすることも少なくない。授業では、何をしたらよいか分からずに考えを書くことができず、自分に自信がないことから発表できないことが多い。

本研究を通して、思いやりのある聴き方ができるようになることで、相手の考えを知り、会話を楽しめるようになるのではないかと考えた。また、物語文を通して登場人物の気持ちを考えることで、自分の思いを表現したり、自分の意見を伝えたりできるようになってほしいと考えた。

## 4 研究の実践

### (1) 関わり合いを通して相手の話を聴く力を高めるために

#### ① 学び合いの約束（手立て①）

安城北部小学校では、安心して話し合ったり、相手の立場になって考えたりできる児童の育成を目指して、クラス会議を行っている。本学級では、1学期に「安心できる学び合いの約束を決めよう」という議

題でクラス会議を行った。出た意見は、「話すときと聴くときの切り替えをする。」「聴くときは、話している人の目や顔を見る、目で見て耳で聴く、話が終わるまで静かに待つ、話している人に注意する。」「話すときは、みんなが静かにするまで待つ、静かになるまで話し始めるのをやめて待つ。」「教室の環境を整えるために掃除をしっかりとる。」「水筒の整とんをする。」等であった。これらの中から児童が選んだのは、「話している人がいる中で声を出して注意すると発言を妨げてしまうため、ジェスチャーで伝える。」と、「グー・ペタ・ピン」を合言葉に「いい姿勢で話を聴く。」であった。その後、次のクラス会議では話している子に対してジェスチャーで伝えようとしても気づくことができない子がいることが議題に上がった。そこで、「優しく肩を叩いて教えてあげる。」という案が出たことで、学び合いの約束が決まった。子どもたちの意見をもとに決まった学び合いの約束を、教室に掲示した。学級で決めた学び合いの約束を日々呼びかけることで、児童が自ら声を掛け合い、意識するようになった。席替えの際に話しやすい友達がいるようにグループ編成を行い、仲のいい児童同士だけで話すことがないように座席配置も工夫した。また、学級全体で話し合う際は教室の中央を向き机で円を描くような隊形にした。その結果、自分から発言する姿や相手の話から考えたことを発表する様子が見られた。

## ② 「ほくトーク」・日直のスピーチ（手立て②）

### ア 「ほくトーク」

毎週木曜日の朝、学校全体で話す・聴く力を育むための活動を行っている。内容としては、SST(ソーシャルスキルトレーニング)やミニゲームなどを取り入れている。学期ごとの目標を決め、1年間通して行っている。これらの活動を行うことで、あまり話したことがない級友と話す機会を作り、誰とでも話しやすい雰囲気作りをした。「記憶力お絵かきゲーム」を行ったときには、班の子の意見を取り入れながら積極的に絵を描くAの様子が見られた(資料1)。また、「アドジャン」では、Aがアドジャンのお題が書いてある紙を持って班の子をまとめるような形で楽しそうに話している姿を見せた。相手の話に興味をもち、自分の考えを伝える場面もあった(資料2)。「ほくトーク」を行ううちに、児童たちの話の幅が広がり、協力する場面や楽しそうに和やかな様子でいろいろなことに取り組む姿が見られるようになった。



資料1

記憶した絵を紙に描くA



資料2

楽しそうにお題を話すA

### イ 日直のスピーチ

日直のスピーチは、好きな教科や好きな季節など、様々なテーマで行った。友達の新たな一面を知ることとで話のきっかけを見つけ、楽しそうに会話する姿が見られた。うなずきや表情から、思いやりのある聴き方ができていると感じた。また、「自分の好きな本」のテーマでスピーチした際には、「とっても面白いよね。」と話す児童がいた。それに対し、内容に興味をもった児童が「そのシリーズ僕も好きだよ。」「みんなはどれが好き?」「この本もおすすめだよ。」等の質問や感想を話す姿も見られた。また、「どっちがいい?」をテーマに、話型を提示してスピーチを行った際には自分の考えをなかなか言えなかった児童もこれまでのスピーチよりも話しやすそうな様子であった。毎朝繰り返して行うことで思いやりのある聴き方で話を聴き、自分の考えを表現する力が身に付いた。

## (2) 自分の思いを言葉で豊かに表現するために

### ① 座席の工夫とグループ編成（手立て③）

全体で話し合う際の座席は教室の中央を向いて全体の顔が見られる円のような隊形にした（資料3）。ペア活動やグループ編成では、自分の意見をしっかりもって発言できる子や誰かの意見を聞いて自分の考えを広げられる子など話の中心になる子を入れるとともに、話しやすいメンバーがいるように人間関係を考えて席替えを行った（資料4）。Aはこれまでグループに話しやすい子がいなかったり、自分の意見に自信がなかったりすると話し合いに参加することが少なかった。しかし、今回の学習では、友達の影響を受けた様子や友達の音読をしっかり聴く姿が見られた。



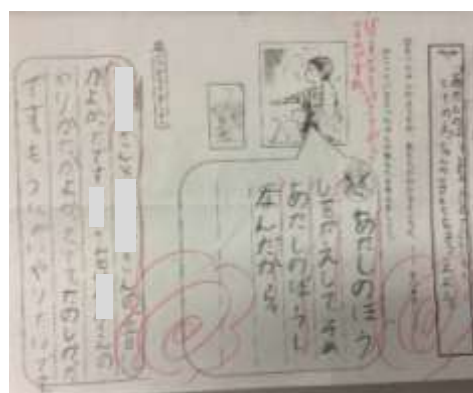
資料3 座席の工夫



資料4 ペアでの話し合い

### ② ワークシートの工夫と学びの足跡（手立て④）

これまでの学習では、教科書とノートやプリントを使用して自分の考えを記入してきた。しかし、教科書の本文に対し、自分の考えをノートに分かりやすくまとめることが難しそうな児童もいた。そこで、場面ごとの本文を載せたワークシートを用いることで自分の考えを書き込みやすくし、自分の思考を視覚化できるようにした。また、めあてや振り返りを書く場所を作り、教科書の挿絵を入れたり、気持ちを表すために吹き出しを使って表情を書けるような丸を入れたりすることで、何をどのように書いたらよいかを分かりやすくした。まず、主人公「えっちゃん」の様子や気持ちが分かる場所に線を引き、線を引いた理由や感情を表す顔を記入させた（資料5）。さらに、ワークシートを冊子のようにファイルに綴じ、一人一人の学びの足跡として見直せる形にした（資料5）。また、グループで聴き合う時間を作ることで新しい考えを取り入れ、えっちゃんの様子や気持ちを付け足して書き込むことができるようにした。その結果、これまでの自分の考えを振り返るために前の場面で書いたワークシートを読む姿も見られた。学びの足跡として授業中に出た意見を模造紙にまとめ、教室に掲示し、学習した内容を視覚的に捉え、児童の読み取りの様子が分かる環境作りを行った。すると、聴き合いの場面で、「前の授業で、この人物が…」と前時の授業内容を思い出すために自分のワークシートや、教室に掲示した学びの足跡に目を向ける児童が増えた。また、聴き合う際も、前の場面との比較をしようとする姿も見られた。教室掲示として、児童の授業中の発言や登場人物の感情に合わせた顔を記入し、学級での学びの足跡として記録した。学びの足跡や話し合いを通して、考えが深まったと感じたのは第五場面である。最初はほとんどの児童が『あたしのぼうしをかえしなさい。』と言ったえっちゃんは、帽子を返してほしくて怒っている。」と書いていた。一方、「お母さんが作ってくれた大切な帽子を返してくれるまで帰らない。」のように、帽子に対する思いの強さに気づいている児童もいた。その後、児童Bが「大男なんかこわくない、早く帽子を返して。」と発言したことに着目し、きつねや牛は怖くなって逃げたのに対してえっちゃんが逃げなかったのはなぜかと問うことで、えっちゃんのそれほど強い思いが



資料5

Aのワークシート下部（第五場面）



資料6 本時の板書



あったことを再確認した。さらに、どうしてこんなにもえっちゃんは帽子を大切にしているのかを問うことで、児童から「お母さんが頑張って作ってくれたから。」「お母さんが名前を刺繍してくれた世界に一つだけの帽子だから。」といった意見が出て、えっちゃんにとって大切な帽子であることに気づくことができた（資料6）。

### ③ フェイスカードと登場人物のお面の作成（手立て⑤）

4月に行った国語科「風のゆうびん屋さん」では、登場人物の気持ちを考える際に、どのような感情があるのか分からず、思うように書き進めることができない児童が多くいた。そこで、どのような感情があり、どんな表情をしているのかが一目でわかるようにするためのフェイスカードを作成した（資料7）。すると、気持ちを言葉で書くことが難しい児童も、まずは表情を書いてみようと思いついた。第一場面から繰り返し行ったことで、表情を書いた後に文字で書けるようになった児童もいた。また、物語文で出てくる登場人物になり切って音読ができるようにするため、お面を作成した。教科書の挿絵を印刷したものやそれを貼るための、細長い帯のような形の紙を用意した。児童はお面の作成が楽しいようで、「早く音読がしたい。」のように、意欲的な声が飛び交っていた。ペアや全体での音読を行う際に、お面の向きを変えることによって、誰になり切っているのかが一目でわかるようになった。音読をしている時には、えっちゃんよりも体が大きいことを表現するために椅子に乗って大男になり切る様子（資料8）や、大男の変化に合わせ、「しぼんでしぼんで…」のように体が小さくなって見えなくなる様子を机の下に隠れて表現する姿（資料9）も見られた。



資料7

フェイスカード



資料8



資料9

## 5 考察

### (1) 仮説1の検証

手立て①では、思いやりのある聴き方ができるようにするために学級で決めた学び合いの約束を確認することで、児童の一人一人が意識できることが増えた。しかし、自分たちで気づくには時間がかかることが多かった。このような時には、思いやりのある聴き方ができている子を褒めることで、教室掲示を見ながら自分たちで決めた約束であることを再確認できるようにした。児童同士で声を掛け合うことが難しいことが多いため、慣れるまでは日々の声掛けを行い、子どもの中で定着していくことが大切であると感じた。

手立て②では、聴く力を高められるようにするため、「ほくトーク」や日直のスピーチを行うことで、楽しそうに会話をする様子が増えていった。「ほくトーク」では、次回も同じ活動を望む声や、楽しい記憶が残っている活動を再度行うと伝えるときには嬉しそうに喜ぶ様子が見られた。また、日直のスピーチでは、話型を用意することで話す練習になったり、どのように話を聴くと嬉しいかを呼び掛けて子どもたちが考えたりすることで、話しやすく、聴きたいと思える雰囲気にすることができた。

以上のことから、手立て①、②は有効だったと考える。今後も教師からの声掛けや手立てにより、子どもたちに学び合いの約束や思いやりのある聴き方を定着させることが必要である。自分たちで決めた約束を意識し、児童同士が楽しく話したり聴いたりする体験を積む活動を続けていけば、児童同士の関わりが増え、思いやりをもって相手の話を聴く力を高められると感じた。

## (2) 仮説2の検証

手立て③では、周りに自分の思いを表現することが苦手なAにとって、グループ活動で自分の考えを表現することは難しい。しかし、日常生活の中で自分から話しかけている子や楽しく会話をする子に近い座席や同じグループにすることで、授業でも自分の考えを伝えられるのではないかと考えた。その結果、自分の考えを伝え、相手の考えを聴こうとする姿が増えた。また、友達の音読を聞いて良かったところをワークシートに書き込んでいた。

手立て④では、これまでの教科書やノートを使った授業では、開くページや書き方に混乱する児童の姿が多く見られた。しかし、教科書の本文を授業で行う一時間ごとにページを分けて作成したことで、机上に出すものを最小限にすることができ、集中して授業を進めることができた。また、ワークシートをファイルにまとめることで、これまでの思考の流れをすぐに振り返ることができ、自分自身の考えや登場人物の気持ちの変化を視覚的に捉えやすかったと感じた。

手立て⑤では、登場人物の気持ちを言葉で書き込むことが苦手な児童が多かったため、まずは表情を見て描くことで気持ちを言語化することが容易になったと考える。また、お面を作成したことで楽しい気持ちを掻き立て、音読をしたいという気持ちの高まりを感じた。その結果、登場人物になり切って声色を変えたり、大きく体を動かしたりして音読することができた。

以上のことから手立て③、④、⑤が学級の児童に有効に働いたことが検証できた。物語の読み取りにおいて、話しやすい雰囲気作りや学びの足跡の作成、楽しく容易に取り組めるような工夫などを取り入れながら登場人物の気持ちの変化を話し合う活動を行ったことで、自分の思いを豊かに表現できるようになった。

## (3) 抽出児Aや他児童の変容

「名前を見てちょうだい」のプリントを綴じる際に表紙として配布したプリントには、Aは、自信がない様子で小さく名前を書いている。しかし、Aはこの単元を通して自分の考えに自信を持ち、堂々と考えを書き込んでいた。さらに、えっちゃんへ向けた手紙では、「これから一緒に頑張ろう。」と自分自身へ向けたエールも書いていた。このことから、Aは登場人物の気持ちを考えながら自分の考えを書くことができるようになったといえる。また、2学期に行った事後アンケートでは読書が好きと答えた児童が増え、物語文の学習にも意欲的になった。2年生の1学期で詩や説明文、物語文を授業で扱ったが、楽しかったものや印象に残った単元を自由記述で回答を求めた。その結果、物語文の「名前を見てちょうだい」が8割を占めた。児童にとって取り組みやすい手立てを多くしたため、楽しく学ぶことができた結果だと思われる。

## 6 今後の課題

本研究を通して、Aや他児童の変容を見ていくことで、有効に働いた手立てがいくつかあったことが分かった。同時に見えてきた課題も多くあった。

一つ目は、思いやりのある聴き方を定着させるために、手立てを提示するだけではなく、継続的に指導することの必要性である。最初の声掛けを粘り強く行い、できるようになってきたことを褒めながら声掛けの回数を減らすことで、児童が自ら気づいて行動できるようにしていきたい。

二つ目は、問い返しや間を児童の実態に合わせて変えていくことである。児童の考えが追い付いていない中で進めてしまったため、児童の考えを深めるための問い返しをいくつか考え、焦点を見定めてじっくり聴き合えるように問い返しをしていきたい。